

世界をまわる石材の旅

山岸良隆¹⁾

ひょんなことでこの地質ニュースに原稿を頼まれ、何度も真剣にお断りしましたが、生来の気の弱さからとうとう引き受ける羽目に陥ってしまいました。文章を書くとなりますと、日頃筆を握らぬ身、呻吟苦悶は覚悟の上でしたが、いよいよペンを取り上げてみますと、頭の一行を書くのに一時間以上もかかる始末、後で読み返すと汗顔ものであることは絶対に間違いのないところであります。

さて、私、関ヶ原石材(株)という会社に身を置くサラリーマンです。会社の概要と私の仕事の内容を前以って説明しておくのが、私の拙文をこれからお読みいただく皆様に対する礼儀かと思ひまして簡単に触れさせていただきます。

関ヶ原石材という会社は文字通り岐阜県関ヶ原町に本社及び工場を置く建築用石材加工会社であります。大理石や花崗岩の原石を、今では95パーセント以上海外から輸入してくるのですが、それを板状に切断し研磨し、ビルの設計図に合せて指定された寸法に切り、建設現場に持ち込み、その石をビルに張り付けるまでを一貫してやっているのが我社の仕事でございます。日本では石材産業というのは決して大きな産業ではありませんし、従って会社の数もそれ程多くありませんが、ヨーロッパやアメリカではなにしろ皆が石の家に住んでいるのですから、多分一昔前の日本の畳屋の数以上に存在していることは間違いありません。ところが不思議なことに、我社に世界のあまたの石会社の中で売上額、生産数量の両方に於て、ここ十年以上世界一の地位をキープしつづけております。ですから世界の石屋の中でセキガハラを知らぬ石屋はないと言っても過言ではありません。少々会社の自慢になり恐縮ですが、私はそういう会社で主に外国との取引を担当しております。外国から原石を買ってくること、或いは、加工した製品を外国へ輸出することなどが私の業務でございます。

ダイヤモンドやサファイヤもカットし磨く前は原石と呼びますが、私共の扱う大理石や花崗岩も加工する前は

原石と呼んでいます。同じ原石という名前でも両者は全く違います。私共がいうところの原石は石切場(石屋用語で「タガ場」という)で切り出された直方体の大理石、花崗岩のことであります。大きさは大小いろいろですが、大きいもので3.5×2.0×1.5メートル約30トン、小さいもので1.8×1.2×0.8メートル、約5トン位のものであります。

工場では大理石や花崗岩、或いはライムストーン、サンドストーンの岩盤から、キズがなくて色や模様の良いところを選び、このような直方体の原石を切り出します。天然のものでありますから原石1個1個寸法も色も模様も違います。特に大理石の場合は色も模様も多種多様、千変万化に変わりますから、買う前に必ず工場に行って1個1個検査しなければなりません。色や模様のお好みは国民性で随分かわるもので、イタリアで売れても日本では売れないものがあつたり、その逆があつたりしますから、どうしても日本人の目で検査しなければなりません。私は大学(文系)を出てかれこれ30年このような仕事に従事してまいりました。観光客や商社の人達が行かれる世界の有名都市は殆んど行かず、皆様が行かれない辺鄙な田舎の石切場しか行っていません。これから書きますものはその長い期間に留りました手帳や出張記録、或いは、頼まれて書いたものなどの中からまとめたものでござ

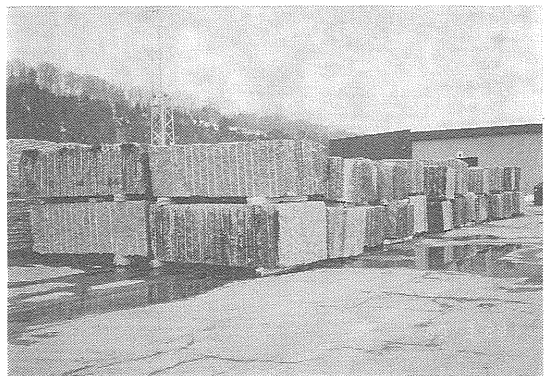


写真1 日本へ輸出される石材。カナダケベック港にて。

1) 関ヶ原石材株式会社：〒503-15 岐阜県不破郡関ヶ原町
2682番地

キーワード：石材、花崗岩、大理石、輸入

ざいます。

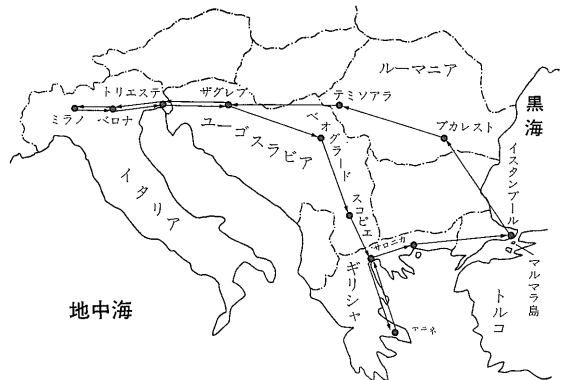
私が今の会社に入社する以前、というと25年以上前のことですが、ある石種（例えば岡山の方成石だとか秩父の蛇紋石というような石の種類）で大きな仕事が決りますと、検収員（原石を検査し買ひ係の人）がその石の丁場に何ヶ月も寝泊りし、つきっきりで出てくる原石を検査していました。しかし、次第に人件費が上り一人の仕事量が増えて来ますと、そのような悠長なことではできなくなりました。交通機関や通信手段が発達して来ますと、世の中便利にはなりますが、その分確実に仕事が増え忙がしくなってくるわけで、果してどちらが人間にとってよいのかよく解りません。

飛行機が未だ一般に利用されなかった戦前ではヨーロッパの石を検収するには船で行くしかありませんでした。日本からヨーロッパ迄約2ヶ月かかったそうです。往復で4ヶ月、仮りに各種原石の検査に2ヶ月かかったとしますと、合計6ヶ月かかりました。その頃は誰もがそれで普通だと思っていたのですから問題はありますが、今なら同じことを一週間でやってしまわないと、何をもたもたしているのかと会社からきつく叱られます。現在は世界中どこに小さな空港でもレンタカーがありますから、飛行機を降りますとすぐにレンタカーを借り目的の丁場迄真直に行くことができます。もっともこちらは買手ですから原石を売る会社に空港迄迎えに来てくれと頼めば喜んで来てくれます。しかし、そうしますと競争相手の丁場には連れて行ってくれません。検査がすむと空港迄送ってくれるか、時間がよければ飯を食おうということになって、他の会社の丁場を見ることができません。一つでも多くの丁場を見て選択肢を多くして、その中から最良の石を買うのが我々の任務ですから、ここはやはりお迎の車に乗るよりは自分でレンタカーを運転せねばなりません。

私が始めて原石検査のためにイタリアへ行ったのは昭和40年、1965年でした。昭和36年に大学を出た時の初任給は今でもよく憶えています、1万6千円でしたから、昭和40年には2万5千円位になっていたでしょうか。日本経済が高度成長期に既に突入していた頃で、給料も物価も何でも5年で倍になった頃です。その時の飛行機賃が日本—イタリア往復で60万円位でした。給料の25から30倍でした。所得に比べて航空運賃はそれ程高かったものですから、利用客も少なくどこへ行く便も必ず空席はありました。ですから切符を買う時、最初の目的地迄は便名を決めますが、その先からはすべてオープンにしておき、仕事が早くすれば早い便に、遅くなれば遅い便を空港へ行ってから決めることができました。往復切符を買う時でも復路はいつもオープンにしておくのが

普通で、それでも好きな時に好きな便に乗れたものでした。こういう切符の買い方では座席が取れなくなりだしたのが昭和50年頃からでしょうか。例によってオープンチケットで空港へ行き好便に乗ろうとしましたが、すべての便が満席で4日後でないと言われびっくりしたことがありました。以来切符を買う時はすべてのフライトを予約することに致しました。昔は仕事に合わせてフライトをきめられました、今ではフライトに合わせて仕事をせねばならなくなりました。

その頃、ヨーロッパはしかし、モーターリゼーションたけなわの頃で、飛行機よりも車の方がより安価でより多く利用されていました。日本では一般サラリーマンでは未だ車の持てない時代で、弊社でも車を持っている人は一人もいませんでした。私はイタリア駐在員として会社からフィアット セイチェント (600cc)、その次にミレチェント (1100cc) という車を買ってもらい、それでヨーロッパ各地の丁場を廻っていました。ヨーロッパでも今よりはるかに車が少なく、その割には道路がよくて、飛行機より車の方が便利でした。今もよく憶えています、その頃一人で行った最長の検収旅行は次のようなものでした。



第1図 南欧の旅検収行ルート

その時はミラノに住んでいましたので、ミラノでパンや水の非常食や毛布を車に積み込み、どこでエンストしても一晩は耐えられるように備えだけは十分にしておきました。

1日目の早朝ミラノを立ちベロナ (Verona) で Rosso Verona という淡い赤色大理石を検収しました。イタリアは全国どこでも大理石を掘っていますが、その中でも4大生産地があって先ず一番大きいのはトスカーナ地方のカララです。ここは白大理石の世界一の産地です。ここで掘られた白大理石はビアンコカララと呼ばれ、世界

中に輸出されビルの内外装, 床面に使用されています。日本でも大きな壁面に白大理石が使われていましたらピアンコカララだと思って間違いないでしょう。その次がここシェイクスピアのロミオとジュリエットで有名なベロナです。ここでは主に淡赤色からページュ色の大理石が採掘されています。その次はローマでここではトラベルチーノローマーノと呼ばれる多孔石が掘られています。ローマの古い遺跡は殆んどこのトラバーチン (Travertine) です。最後はイタリア半島のアキレス腱の部位にあたるプーリア地方のトラニです。この地方からは模様が目目に似た美しいページュの大理石が出ます。最近では店舗や浴室の壁材としてタイル状に加工されてイタリアから輸入されています。さてベロナで検査を終え休む間もなく北の国境の町トリエステへ入りました。ここでは小さい貝や海草の化石の入るアウリジナと呼ばれる灰色の大理石を検査しました。日が暮れる迄には未だ時間がありましたので、国境を越えユーゴスラビアに入り、車で3時間程南下してザグレブという大きな町で宿を取りました。ユーゴスラビアから買う大理石は南のマケドニア

地方のスコピエというところから出る純白の大理石です。以後何度も車でスコピエ迄行きましたがいつもこのザグレブで一泊しました。最近の日本の新聞を見ますと、ユーゴスラビアでは民族の対立が表面化しているようで、その中心地が私にはなつかしいザグレブやルブリアーナです。今頃どうなっているのでしょうか。スコピエで出る白大理石は現在世界のあちこちで出る白大理石の中で最も純白に近いものです。完全に純白な大理石は世界中どこを探してもありません。必ずウスネズミの線が入ったり雲が入ったり、又は黄色や茶色の帯が入ります。その模様や色の入り具合で美しくなったりきたなくなったりします。大理石は昔は構造材として使われましたが、現在の建物では化粧材としてしか使われません。壁紙と同じ使われ方です。ですから色や模様がきれいではないといけません。そういう意味で純白は完全無欠を意味し、人の心をとらえますので、ここスコピエで産するシベック (Sivec) と呼ばれる世界で最っとも白い大理石が珍重されます。高価な石ですが日本には随分輸入されています。

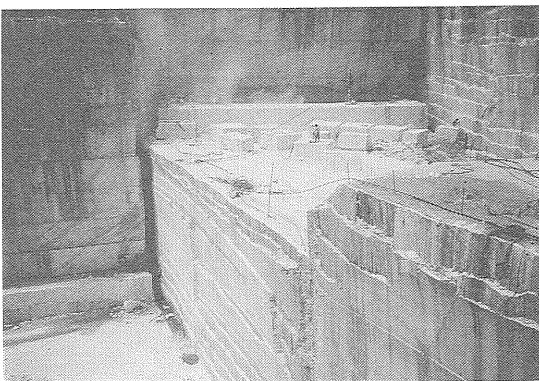


写真2 イタリア トスカーナ地方カラカラの大理石採掘場。

次の日は更に南下してギリシャに入りアテネでペンテリコンホワイトという白大理石を検収しました。アテネの高台に今も残るパルテノンはこの石で作られています。ペンテリコンという白大理石は白地にウスネズミからウスミドリ帯が、筆で掃いたように入れば非常に美しい石なのですが、半紙に油がにじんだような模様になりますと汚らしくなって売れません。全く同じ丁場から同じように掘られた石が、僅かな模様の違いではるばる日本まで多額の費用をかけて運ばれるものもあり、いつまでも丁場に残っているものもある、美とは何か解せぬものでありますが、高くつくものではありません。アテネの後にはもうこれ以上南下できませんので、もと来た道を北上し、エーゲ海の北端にあるテッサロニキやカバラ



写真3 ローマの遺跡コロッセオ。トラバーチンが使われている。



写真4 ギリシャ アテネのパルテノン神殿。ペンテリコンホワイトという白大理石でできている。

という地でやはり白大理石の丁場を見て、ここから東へギリシャを横断してトルコに入りイスタンブール迄行きました。イスタンブールからボートで2時間程、マルマラ海に浮ぶマルマラ島はまさに大理石でできた島です。ウズネズミ色の地に黒い線が平行に走る大理石を産します。英語のmarble, イタリア語のmarmo, フランス語のmarbre 等大理石の語源はすべてギリシャ語の marmor から来ており、その意味は「磨いたら光る石」だということだそうです。マルマラ島は文字通り大理石島です。ここからボスポラス海峡を渡るとそこからアジアだと言いますが、この時はアジアには渡らず、来た道を戻りブルガリアに入り黒海に沿って北上し、ルーマニアの首都ブカレストに着きました。ここで鉱山省のお役人とルーマニアの白大理石を買う商談をして、その産地テミソアラという町まで行きました。テミソアラという町はユーゴスラビアの国境に近い町ですから、ルーマニアを横断したわけです。ここではルスキツァという白地に淡いピンクの入る白大理石を買いましたが、今頃その丁場はどうなっているのでしょうか。この時の検収旅行はこの丁場が最後でした。無事予定通り各地の丁場を廻り、それぞれの大理石を検査し買い終えましたので、後はドライブを楽しみながらミラノに帰るだけです。結局9日間の検収旅行でしたが、全体の時間を10とすると、車の運転が9、肝心の石の検査が1というような時間配分でした。ミラノに帰った時はフラフラで体重は3キロほど減っていました。

飛行機を使った最長の検収旅行は、日本から東南アジアを経てヨーロッパに入り、リスボンからアフリカはアンゴラに行き、ここで黒ミカゲを検収し、今度は大西洋を越えてブラジルに飛び数日間北から南迄ブラジルの主要な花崗岩産地を訪ね、帰途ペルー、アメリカの石を調べたという地球を一周し更に南北にも上下した丁度1ヶ月を要した旅行でした。後で飛行機の切符をかぞえてみたら35枚ありましたので、30日間の旅行で35回飛行機に乗ったこととなります。この旅行でアンゴラの首都ルアンダからブラジルのリオデジャネイロへ渡る飛行機の中で、機内に備え付けの雑誌の地図を見ていましたら、アフリカと南米大陸がジグゾーパズルのようにぴったり合うことにあらためて驚きました。普通日本で見ると世界地図ではアフリカと南米大陸が同時に同じページにのっていることはありませんから、昔大陸は一つだったという学説を聞いてはいても、どこがどう割れて今のようになったのか気にもしていませんでした。しかし、今乗っているのはアフリカから南米へ行く飛行機ですから、その座席にある雑誌の地図には当然のことながら、同じページに左に南米大陸があり右にアフリカ大陸

が隣り同志にのっています。それをぼんやり見ているうちになるほど大陸は一つだったのかとあらためて驚かされました。そしてなおも見ているうちに大西洋をはさんで南米側の花崗岩とアフリカ側の花崗岩と色や結晶に共通性があることに気付きました。では他所はどうかとこれまでの経験で考てみますと、確かに何か特徴というか原則というか何かがあるように思えます。例へば、日本、韓国、中国などアジアの東側で産する花崗岩は主に白、グレー、ピンクの中目の花崗岩が多く、インドや北欧で産する赤や黒ミカゲは全くといってよいほどありません。インドや南アフリカでは逆に黒ミカゲや赤ミカゲ、或いは茶色、緑色といった色ミカゲが多く、日本の稲田石や韓国の加平石のような白ミカゲがあまりありません。アフリカの西側、アンゴラやナミビアと南アメリカの東側、ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチンあたりでは黒、赤、錆などのミカゲ石が出ます。カナダの東側、ケベック、オンタリオ州では赤、茶、紫、黒ミカゲ、もう少し西に入って北米大陸の中央北部、即ちカナダのマニトバ、アメリカのノースダコタ州あたりでは紫、赤ミカゲが産出されます。北米大陸の東側沿いに北から南へ、バーモント、ノースカロライナ、ジョージアの各州では白とグレーミカゲが出ます。ここから大西洋をはさんでその対岸スペイン、ポルトガルでは同じような白、グレーミカゲとピンクミカゲが出ます。北欧のノルウェー、スウェーデン、フィンランドでは黒、赤、茶ミカゲとブルーパール、エメラルドパールのようなラブラドライト(斜長石)等が出てなんとなくカナダのケベックの石に近い感じがします。大西洋とハドソン湾にはさまれたケベック州を含む半島をラブラドールと言い、ここで発見された青緑の閃光を発する斜長石をラブラドライトと、最初の発見地に因んで名付けましたが、我々石屋の業界ではラブラドライトと言うとノルウェーのブルーパールとエメラルドパールしか頭に浮かびません。こうしたことも何かカナダ東部と北欧との間に関係がありそうな気がします。

こんなことを機中で考えているうちに、昔大陸が一つだった頃の地図に現在我々が知っている花崗岩の産地と名前を書き込んでみると、面白い結果が得られるのではないかと思ひ付きました。早速日本に帰ったらやってみようと思われぬように手帳に書き込んでおきました。帰国後時間を見て作ってみたのが第2図の「花崗岩分布愚説図」です。A、B地域には赤茶黒の色物ミカゲが多く、C、E地域には白、グレー、ピンク等の比較的颜色のうすいミカゲしか出ません。これは偶然の一致なのか、それとも何か確たる根拠があるのでしょうか、その説明はその道の専門家にお任せするとして、さて皆さんはこの地

第2図
石材分布からみた
大西洋の拡大

2億年前



1.35億年前



現在



A地域：インド、南アフリカ

産地：1、2

色：黒、赤、茶、マルチカラー

B地域：アンゴラ、ナミベ、ブラジル、ウルグアイ

産地：3、4、5、6、7

色：黒、錆、赤、マルチカラー

C地域：スペイン、北米、サルデニア

産地：8、10

色：白、グレー、ピンク

D地域：カナダ、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド

産地：9、11、12

色：黒、赤、ラブラドライト

E地域：日本、韓国、中国

産地：13、14

色：白、グレー、ピンク

図からどこが一番興味を持たれるでしょうか。

現在、世界的に黒ミカゲが供給不足です。南アフリカのベルフェースト ブラックは1立米当り FOB ダーバン港渡しUS\$2,000と馬鹿高くなりましたし、インドの黒も今年の入札では更に高くなると予想されています。一攫千金を狙うなら黒ミカゲです。さて、未開発の地で黒ミカゲが出そうなところはどこでしょうか。南アフリカやインドと陸つづきだったところ、それはオーストラリア北西部、南極大陸北部、そしてマダガスカルではないでしょうか。南極でミカゲを掘るといって採掘費がとてつもなく高くなり商業ベースにはとても乗らないでしょうが、オーストラリア北西部では既にいくつかの

会社が試掘を始めています。いずれ成功する会社が出て来るでしょう。マダガスカルについては未だ黒ミカゲが発見されたという話を聞いておりません。もし暇と金のある人がおられたら一度マダガスカルをお調べになっては如何でしょうか。もっとも冒険ずきで開発精神豊かなヨーロッパ人がとつきの昔に調べ上げているかも知れませんが。

YAMAGISHI Yoshitaka (1991) : World trips for seeking good stones.

<受付：1991年3月22日>